NPO法人
日本子守唄協会

Incorporated nonprofit organization Japan Lullaby Association

ららばい通信

Lullaby News

2024年
夏号

特集 佛陀の戦争 秋田雨雀

画／大野隆司

［目　次］

■ 唄のページ …1
■ 特集　佛陀の戦争　秋田雨雀 …2
■ COLUMN／アインシュタインの言葉　西舘 好子 …5
■ フジコ・ヘミングさんのピアノそして死 …6
■ 連載
鬼の留守に洗濯しょうよ　わらべうた 童謡 詞華抄6　尾原 昭夫 …8
■ 連載 子ども虐待は、今
子どもの意見 その2　川﨑 二三彦 …12
■ 特集
お母さんのための 子守唄教室 第4回　西舘 好子 …14
■ 連載 日本子守唄紀行
「佐賀の子守唄とヨイトマケ」　鵜野 祐介 …16
■ 連載
酒は天の美禄にして最強の養生法なり　帯津 良一 …18
■ 連載 直島便り
私の島暮らし　山根 光恵 …20
■ 活動報告 …21
■ 寄付者名簿

表紙・本文デザイン／和田光司

2024年7月発行

令和6年 ららばい通信 夏号をお手元にお届けさせていただきます。

AIの進歩はどこまでいくのか、未来に光となるか闇になるか誰にもわかりません。

便利と合理性に優れていても、悲しみや慈しみといった深い感情を持つ人間性は劣化するのではないでしょうか。

「業」という言葉があります。五感を使っての日常の行いは人間本来の営みの喜怒哀楽に帰依します。人間であれば悩み苦しまないということはあり得ないという教えの言葉です。自業とは自分の行いの事、だからこそ、良くも悪くも、その結果は自分に返ってくる、自分が得るものだという「自業自得」があるわけです。

AIに問い、AIに答えを出させ、AIに従ったら、その先はAIが責任取ってくれるのでしょうか。あくまでも生きることは自分の意志であるべきだと思います。

私は孤独死という言葉は嫌いです。この年になると孤独は生きる選択の二つだと思えるからです。

また、退職代理業という仕事が出来たことを本当に嘆かわしいと感じています。

自分の人生は自分の意志で自分の言葉で 伝えることのできない人間がこの先、何を手にすることができるでしょうか。AIがらみで生活が始まったら、それは人間をやめる覚悟にしてほしいと思います。

予測では今夏は異常な暑さと言われています。異常な夏にしたのは私達人間なのですが、嘆いたりクーラーに頼るだけでなく、涼をとる夏の過ごし方も考える時間が欲しいですね。風のさわやかを改めて感じるような一時に知恵を絞って。

日本子守唄協会　理事長　西舘好子

ののさま地蔵

国見　修二（詩人）

辛苦の道を歩き続けて
ようやく光が当たった晩年
一生懸命生きて人様の縁によって
ここにたどり着いた

ここでまた三味線を弾いた
ここでまた昔の同業者と出会った
ここでまた瞽女唄を教えようとは

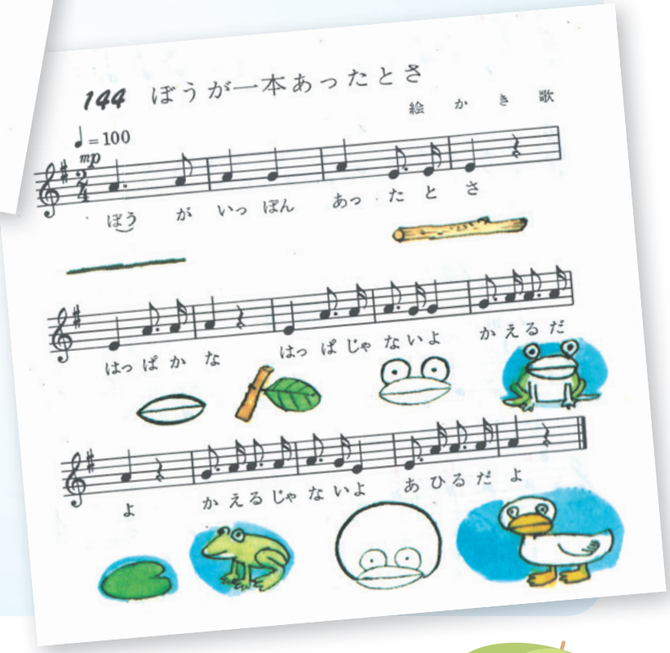
ののさま
ののさま
あなたのお陰です

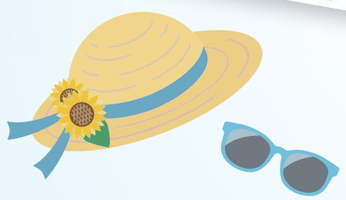
母の乳房に触れる赤子のように
ゆっくりと地蔵を撫でて
深く祈った

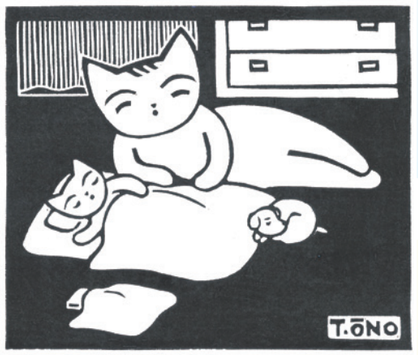
ののさま地蔵―新潟県胎内やすらぎの家にある。
胎内やすらぎの家は、養護盲老人ホーム。
最後の瞽女と言われた小林ハル終の棲家
7月28日(日)13:00～
ねぎぼうずで「瞽女うたの会」があります

唄のページ

たのしい みんなの歌







「子守唄・スマホを切って」

大野　隆司　詞

1
ねんね　ねんね
猫の子　ねんね
犬の子　ねんね
赤ちゃん　ねんね
ママと　ねんね

2
勇気を出して
スマホを切って
切ったスマホも
いっしょにねんね
ねんね　ねんね

3
だってこの今
ねんねの時間
ねんね　ねんね
誰のものでも
ないこの時間

4
ねんね　ねんね
赤ちゃん　ねんね
ママも　ねんね

特集

佛陀の戰爭

明治16～昭和37年
劇作家、詩人、童話作家、小説家
秋田雨雀

昔、印度の國に、一つの大きな湖がありました。その湖の周圍に二つの國が並んでゐました。各々の國には強い王樣があつて、その王樣の下に、優れた頭の坊さんや、大變に勇敢な多勢の家來がありました。そしてその坊さん達や、多勢の家來達は王樣の爲には、いつでも自分の身を投げ出しても良いと誓ひました。

ところがこの湖の片邊に幅五里程長さ十里程の山がありました。その山には何千年經つたか知れない程の大木が生ひ茂つて居りました。この一帶の山地は、何處の國に屬した山地であるか誰も知つてゐる者はありません。たゞ甲の國の山だと云ふし、乙の國の人に聞けば乙の國の山だと云ふだけです。多くの學者達はこの山が何處の國の山だかと云ふ事を調べるために、長い時間を費しました。その爲に古い黴の生えた昔からの書物を、さがし出したりしましたけれども、さつぱり分かりませんでした。併しそれにも關らず、甲の國の人達はその山を自分の山だと思ひ、乙の國の人人はその山を自分の山だと思い込んでゐる爲に、二つの國の人人は、いつでもその山がもとで喧嘩をしました。

甲の國の王樣は、ある時に多勢の家來をつれて、その山を占領して、その山の頂に自分の國の旗を立てました。そして多勢の家來に向つて云ひました。

「この山は確かに我が王國の山である。その證據は私が今この山に立つてゐるので分かるだらう。私は我が國の國民を愛し我國土を愛するが故に、この山を占領するのだ。」

そして、甲の王樣の軍勢は勇ましい凱歌をあげて王樣の都へ歸つて來ました。

乙の國の家來達が、ある時、その山の方を見ると、山の上には隣國の國旗が立つてゐました。それを見た家來達は大變に怒りました。そして早速その事を王樣に申上げました。王樣はそれを聞いて齒ぎりしをして怒りました。

「何の權利があつて、私の愛する國土を犯すのであらう。私は私の國民と私の國土を愛するが故にこの屈辱を忍ぶことが出來ない！」

と云つて、早速多勢の家來を召しつれて、國境の山の方へ進んで行きました。そして甲の國の王樣の立てた甲の國の國旗を押し倒して、その跡へ自分の國の國旗を押し立てました。

そして云ひました。

「この山は確かに我が王國の山である。その證據は私が今この上に立つてゐるので分るだらう。私は我が國の國民を愛し我が國土を愛するが故にこの山を占領するのだ。」そして乙の王樣の軍勢は、一層勇ましい凱歌をあげて王樣の都へ歸つて來ました。

その話を聞いた甲の王樣は、大變にお怒りになつて、早速多勢の家來を宮殿の中にお集めになつて會議をお開きになりました。ところが多勢の坊さん達は、今こそ王樣の爲につくすべき時だと云つて、是非とも王樣に正義の戰爭をお起しなさるやうにおすすめしました。また多勢の勇敢な家來達は、今こそ王樣に一身を捧げる時だと云つて、勇んで戰爭することを誓ひました。勇ましい王樣の血は、國民の爲に熱して來ました。そして國民の爲に勝利をバラモンの神樣に祈りました。時を移さず、甲の王樣の軍勢は夜の明けない中に、都を立ち出でて目指す國境の山に進んで行きました。山に着くや否や早速乙の國の國旗を押し倒して、何千年たつたか知れない程の大森林に火を放ちました。流石の大森林も猛火に包まれて、まるで火の塊のやうに燃え上がりました。そして甲の王樣の軍勢は一度に聲を立てて「萬歳」を叫びました。

それを見た乙の國の王樣は、殆ど氣も狂ふばかりに怒りました。そしてここでも宮殿の中で大會議が開かれました。先づ王樣は賢い坊さん達に、今自分が戰爭を起こすのは、正しいか、正しくないかをお質ねになりました。

「王樣のなさる事に、何で正しくない事がございませう。王樣は即ち正義でございます。そして王樣のなさる戰爭はいつでも正義の戰爭でございます。一刻も猶豫なく王者の戰爭をお進めなされるのが至當でございませう。」

と、坊さん達は一齊にお答へしました。乙の國の軍勢は夜の中に都を立ち出でて火の海のやうに燃えてゐる山の方に進んで行きました。その時に甲の國の軍勢も山を下りて、乙の國の軍勢を迎へ打ちました。乙の國の軍勢が山の近くまで進んだ時には、もう甲の國の軍勢の爲に多勢の兵士を撃たれて了つてゐました。

乙の國の王樣はそれを見て非常に殘念に思ひました。

「不甲斐ない奴らだ！　この上は自分獨り踏み止つて華々しく戰死を遂げるばかりだ！」

と叫びました。それを聞いた多勢の家來達は、無理に王樣におすすめして、一旦退却することに決めました。

此の戰爭の結果、湖の片邊にあるこの山は、甲の國の所有になつて了ひました。そして甲の國の國民は自由にその山を使ふことが出來るやうになりました。併しその時には何千年たつたか知れないやうな、あの大森林の面影はどこにもなく、燒跡の山の上には赤土が露出しになつてゐるばかりでありました。甲の國民がこの山を占領したならば、どんなに幸福だらうと思つたのは、昔の夢でありました。

乙の國の國民達は、どうかしてこの山をもう一度占領して昔の恥辱を雪がうと、そればつかりを願つて居りました。王樣と王樣の家來は、甲の國と戰ふ爲に、一生懸命に兵術を研究しました。そして國民にはなるだけ節儉をして、軍備を擴張しなければならないと敎へました。それから五年の歳がたちました。乙の國の軍勢は甲の國に攻め寄せて行きました。

そして軍勢が國境の山の上に着いた時には、甲の國では昔の戰爭のことを忘れて了つてゐました。その機會に乘じて、乙の軍隊はどんどん甲の國に攻め寄せて行きました。乙の國の軍隊は女や子供を手當り次第に殺しながら進んで行きました。そしてとうく甲の國の都に近い處まで軍隊を進めました。

この戰爭の結果として、甲の國では一旦占領した國境の山を、乙の國に讓らなければならないことになりました。そして戰爭は一旦終りをつげました。

併し、この戰爭はほんとうの戰爭の終りではありませんでした。この後、甲と乙の國は長い間戰爭を續けました。甲が勝つたかと思へば乙が勝ち、また乙が勝つたかと思へば、甲が勝ちして、この戰爭は、いつほんとうの終りを告げるかと云ふことは、誰にも分りませんでした。そしてこの二つの國の國民は戰爭をする爲めにばかり全力をつくしてゐるので、田畑が荒れ放題に荒れて國がだんだん貧乏になるばかりでありました。そして戰爭の爲に親兄弟を失つた者や、または戰爭で負傷をした者は、醜い風をして國中に乞食して歩きました。

それでも、王樣と王樣の家來達は自分の國土を愛し自分の國民を愛すからだと云つて、いつまでも戰爭を止めやうとはしません。夜も晝も人は戰つてゐました。そして毎年何千人何萬人の人がこの戰爭の爲に死にました。……

ある時に、一人の黑い僧衣を着た坊さんが、旅をしてこの二つの國を通りました。この坊さんはこの二つの國が絶えず戰爭をしてゐるのを知つていました。そしてどうかしてこの戰爭を止めさせたいと考へました。坊さんは先づ甲の國の王樣の處へ行つて質ねました。

「あなたは何の爲めに戰爭をなさるのですか？」

「國民の爲めに」

と王樣は言下にお答へになりました。

その時坊さんは云ひました。

「王よ、國民は一體何を求めてゐるのでございませう？」

「國民は正義を求めてゐるのである。」

と王樣は答へました。

「正義とは何でございませう？」

「正義とは權威を信ずることである。」

と王樣は答へました。

「權威とは一體どういふことでございませう？」

「權威とは意思を持つことである。」

と王樣は答へました。

「意志とは一體何でございませう？」

「意志とは生活を意識することである。」

と王樣は答へました。

その時に坊さんは云ひました。

「あなたはあなたの國民を愛しておいでなさるならば、早くこの戰爭をお止めにならなければなりません。」

「私は國民を愛するがために正義の戰爭を起してゐるのである。何故戰爭を止めなければならないのであらう？」

とまた王樣は云ひました。

「あなたは、あなたの國民と、國民の生活を愛してゐるならば、先づあなたの國民の生活を見なければなりません。國民は權威を愛するものではありません。國民はただ幸福を求めてゐるものでご

ざいます。」
「私は國民の幸福を願はなかつたであらうか？
いや私は國民の幸福を願ふ爲めに戰爭をしてゐるのである。」
と王様は答へました。
「併し王よ、あなたは國民の幸福を願つてゐるとお云ひになりながら、國民を最も不幸な狀態に陥れておいでになります。あなたはあの國境の小さな燒山を手に入れやうとして、長い間戰爭をしておいでになります。併し國民はそれによつて少しも幸福になつてはゐません。いや却つてその反對にどれだけ多くの國民が、その爲めに苦しんでゐるか知れません。」
「いや、國民は私の爲めに喜んで戰ひ、喜んで死んでくれる。私はまた國民のために全力をつくして戰つてゐる。」
と王様は云ひました。
「併し王よ、あなたは燒土と人間の生命とどちらを尊いとお思ひなさいますか？」
「勿論わたしは人間の命を尊ぶ。」
と王様は答へました。
「それならばあなたはあの十里四方の燒土のために、何故あなたの愛する國民の命をお捨てなさいます？　人間の命は、どれだけ尊いものを持つて行つても秤にかけることは出來ません。人間の生命は、その唯一つの生命でさへも、宇宙の廣さを以つても購ふことの出來ないほど尊いものでございます。あなたの一番小さな一人の家來の命を購ふ爲めに、何を以つて行つたらいいのでございませう？　あなたはあの小さな燒山を手に入れる爲めに無數の人間の魂を亡ぼしてお出でになります。王よ國民は決して權威を求めてゐるものではありません。
國民は平和を愛するものであります。」
「平和？　その平和こそ私の求めるところのものである。私は永遠の平和の爲めに戰爭してゐるのである。」
と王様は答へました。
「併し王よ、あなたは永遠の平和を求めやうとして、永遠の戰爭を求めてお出でになります。王よ、「永遠」とはこの「刹那」にあるのでございます。この「刹那」こそ「永遠」の姿でございます。この「刹那」を置いて、どこにも「永遠」はございません。
あなたの求めてゐる「永遠の平和」は永遠の平和ではなくて、「永遠の苦痛」でございます。」
かう云つて、坊さんは甲の國を去つて了ひました。それからまた、乙の國の王様に向つて、前と同じ質問を繰り返しました。そして靜かにその國を去つて了ひました。

＊　＊　＊

それから何年たつたか知れません。その時には、この二つの國は非常な平和な國になつて居りました。王様の家來達は、劍や槍を持たずに靜かに町を歩いてゐました。女や子供は丈夫さうな、また愉快さうな顔をして微笑をしながら町を歩いてゐました。そしてあの國境の燒山の上には若い林が生ひ茂つて林の中には小鳥が樂しさうに囀つてゐました。昔あんなに戰つた甲の國と乙の國は、今は兄弟のやうに仲好くして交際をしてゐました。もう誰に聞いて見ても、昔の戰爭の話を知つてゐる者はありませんでした……。

「奇怪なこと」

西舘 好子

マリーセレスト号事件が起きたのは1872年、今から152年も前の事になる。
摩訶不思議な船舶史上事件だ。
アメリカ船籍の帆船マリーセント号には積荷の油の他、船長とその妻、子ども、士官二人、乗員五人、合計十人が乗り組んでいた。
そして一か月後、航路のほとんどを終えたとこで、ポルトガルの沖合六百マイルの海上を漂流していた。しかも、その船には十人の姿はなく無人漂流していたのだ。
発見十日前まで航海日誌は記入されていたから、その十日間に何事かが起きたに違いないが、それを証明する痕跡は全く残されていなかった。事件はあまりに不可解、奇妙で、今日に至っている。
この事件で最もらしい推理をしたのは日本の推理作家だという（誰だかがわからない）作家は麦芽菌説というもので、その説によるとある種の麦芽菌は人間の脳に幻覚を起こす作用を持っているとか、マリーセント号の食料用小麦粉がその菌に汚染していたに違いないというものだった。古米に有害菌が発生し、幻覚とヒステリーという説が作られた以前の話だが、事件は今もって解明されていない。しかし、全員が消えるという事態はやはり不気味だ。
コロナが起きて、終息した後もれワクチンの後遺症だ、コロナは人口抑制剤だと説はあとから出てくる。不思議なことはやはり続くのだろうか。

COLUMN

今は古くなった名言ですが
「アインシュタインの言葉」

西舘 好子

近代日本の発達ほど世界を驚かせたものはない。
その驚異的発展には他の国と違ったなにものかがなくてはならない。
果せるかなこの国の歴史がそれである。
この長い歴史を通じて一系の天皇を戴いて来たという国体を持っていることが、それこそ今日の日本をあらしめたのである。
私はいつもこの広い世界のどこかに、一ヶ所ぐらいはこのように尊い国がなくてはならないと考えてきた。
なぜならば、世界は進むだけ進んでその間幾度も戦争を繰り返してきたが、最後には闘争に疲れる時が来るだろう。
このとき人類は必ず真の平和を求めて世界の盟主を挙げなければならないときが来るに違いない。
その世界の盟主こそは武力や金の力ではなく、あらゆる国の歴史を超越した、世界で最も古くかつ尊い家柄でなくてはならない。
世界の文化はアジアに始まってアジアに帰る。それはアジアの高峰日本に立ち戻らねばならない。
我々は神に感謝する。神が我々人類に日本という国を作って置いてくれたことにである。

アインシュタインが来日し、帰国に当たり残したメッセージとされています。1922年、日本は大正11年、今から102年も前のこと。原文は残されていないそうです。このメッセージに深い感銘を受けている訳ではありませんが、アインシュタインが日本を大いに気に入ったようで、美しい建築と伝統的芸術、日本人の道徳心にあふれた人柄に魅せられ、日本を賛美する言葉があちらこちらに残されています。
現代、このメッセージがむなしく響くのは気のせいでしょうか。日本の素晴らしい歴史や文化に心をかたむけるという人はどれほどいるでしょうか。また、文明は進むだけ進んだ事実、戦争はとどまることを知らず、疲れ果てるどころかますます巧妙な形で世界が参戦する様を呈しています。盟主（指導者）は武力や金の中で権力の権化と化し、最も誇れる家柄もそのカリスマ性を失っています。
私たち個人も日本人特有の心の豊かさを失っているのではないでしょうか。死語となりつつある「道徳」とは、人と人が生きていく上での配慮や優しさ、所作や精神性をもって日々魂の浄化を求めていくものです。個人の勝手な言い訳や欲望に理屈をつけて、無作法や行儀の悪さを自由とか権利とか言わないでほしいとしみじみ思います。学ぶ苦労や努力、謙虚さや恥じらいといった日本の伝統的な心のありようは、すでになくなっていると感じますが、これは次世代の子ども達の未来に影を落とすことになるかもしれません。
改めて、日本の歴史や文化を見直したいと思います。賛美された日本の国民の一人であることを誇れるように努めていきたいと思います。日本人の情感や優しさに裏付けされた言葉や行いを日ごろから心がけたいと思います。
日本という国も、戦争や原発に猛反対し、世界の平和を発信できる国のリーダーになってほしいと祈ります。
それこそ、アインシュタインが愛した日本に近づく道なのだという気がしてなりません。

フジコ・ヘミングさんのピアノ そして死

西舘 好子

２０２４年４月21日 異才のピアニストとして活躍していたフジコ・ヘミングさんが亡くなりました。92歳でした。

昨年11月に自宅の階段から落ちて病院に搬送されたと伺いましたが、死因は入院先で見つかったすい臓がんによるものでした。

多くの方から事務所にお悔やみの電話をいただきました。

というのも、協会が創設している群馬県下仁田に創設した女性村「ねぎぼうず館」にはフジコ・ヘミングさんの部屋があり、幼少期よりフジコさんが使用されていたピアノとフジコさんの版画が、緑の森を背景にして飾られ、多くの方に公開されているせいだと思います。

今から3年前の事です。

長い付き合いの版画家井上勝江さんの個展が新宿京王プラザホテルでありました。版画関係の友人であるコシノヒロコさんやジュディオングさんもいらして、みんなで雑談していました。

私は近々立ち上げる女性の自立を応援する「女性村」の話をしていました。

以前オーストラリアで見聞したたった6人で山の中から女性たちが立ち上げて作った村は、女性たちの独特の創意やアイディア、実行力でみるみる大きな組織となり、そんな村を女性と子供たちのために作りたいと井上さんと計画していました。コシノさんもジュディさんも賛同して、絵を寄付するなどの話で盛り上がっていた時、少し離れたところにいらしたフジコさんが、車いすでそっと寄っていらっしゃいました。フジコさんも会場にいらしていました。フジコさんの写真を撮り続けていらしたカメラマンの中嶌英雄さんがお連れになったようです。

「ねえ、そこに私が子供のころから弾いていたピアノいらない？」

それがフジコさんと私の最初の出会いでした。むろん、その唐突な申し入れを誰も信じませんでした。

ピアニストがピアノを手放すことはあり得ないし、ましてそれがフジコさんであり、見も知らない人に上げるといった代物でないことはみんな承知していました。本気にするわけはありません。

しかし、そのまさかが現実になりました。それを機に何度か文通していた後に、ある日我が家の電話が鳴り、フジコさんの声で一方的に「あなた、お金とピアノとどっちがほしい」と聞いてきました。私は即「ピアノがいいです」と答えました。

それでもまだ信じることができず、フジコさんと、長いつきあいであるカメラマンの中嶌英雄さんにお話をしました。むろん中島さんも半信半疑。

「気まぐれだから、本気にしない方がいいけど本当ならもらったに越したことはないし、でも、後々のために、確認し約束を書面にしておきましょう」と提案してくださいました。

２０２２年5月下旬のその日、東京人見記念講堂で行われたコンサートに出向きました。客席は満杯、コンサートは無事に終わり、楽屋にお伺いしました。

がらんとした楽屋には花ひとつなく、フジコさんはぽつんと大きな体を心細げにして椅子に座っていました。

向こうから話しかけるということはなく、私はあまりピアノのコンサートというのにきたことはないなど口火を切りました。

「なぜ？」

「ピアノという楽器が何かとてもヒステリックな音のように思えたりして」

「あなたの言うことは当たっているわ、男のピアニストが上からたたきつけるものという意識で弾く、力ずくでね、そう信じているのよ。私はそうは思わない。楽器は心で人間が音を出すものでしょう」

とりとめのない話だった。その日、中嶌さんは「フジコさん、本当に日本子守唄協会にピアノあげるの？だったらここにサインして」

フジコさんはいいわよ、とためらうことなく無言でペンを走らせました。

「いつ取に来るの、あのピアノは私よりずっと価値があるわよ」

そしてそれは本当になり、この年の7月2日私たちは下北沢の自宅から群馬県下仁田までピアノを無事搬送しました。

搬送当日、フジコさんは最後なのでお別れにというので三曲弾いてくださいました。一曲は「中国地方の子守唄」私は初めてこの曲で涙が出ました。

どんな演奏より、今までそんな経験はないほど、自然と涙がこぼれる感動を覚えたのです。

「フジコさんいつか子守唄をやりましょう」

「いいわね　日本の子守唄ね」

むろん今となればむなしい悲しい思い出となってしまいましたが。

何回かしかお目にかかっていない。その間文通は続いたし、ポツンポツンという話の中から、はがきの文面から、フジコ・ヘミングさんという一人の稀有な女性の生き方に触れることはあったと思います。しかし、それはフジコさんの小さな一部でしかありません。

孤独と猫が好きと言い、寄ってきた猫に「噛まれるから手を出さないで」と遮られました。

「私は猫の自由さが好きなの」

猫の自由さと自分の自由さを同一している矍鑠たる生き様をつらぬき通して逝ったのだと今は思います。

「あんなに憎んだ母だけど、そのおかげで生きられたことを思うと、やっぱりありがたいわ」その母から厳しい稽古の日々に使われたピアノは、確かに今では手に入らない逸品。百年を経てなお、調律してくださった調律師の方からよくここまで丁寧に使っていたというほど手入れが行き届いていました。

象牙の鍵盤、彫刻が施された譜面台、左右のろうそく立て、ピアノを支える脚足、第二次大戦のベルリン空襲で消滅したピアノメーカーが作ったとされるピアノは、もはや世界に十数台しかないという名品と判明しました。

たいへんな預かりものをしたものだと思いますが、フジコさんの心のままに下仁田の自然の中にそっと眠らせてあげたい気もしています。波乱万丈の中で幕を下ろした フジコ・ヘミングさんの面影がどこかにいるような部屋はずっと保存しておきたいと願っています。

鬼の留守に洗濯しようよ

わらべうた 童謡 詞華抄7

わらべうた研究家　尾原 昭夫

鬼ごっこ　歌川芳藤画
子宝遊寿双六より

鬼のいないうち　二代目歌川広重画
友雀道草双六より

鬼の来ぬまに

前々回の「ちょうちちょうちあわわ」で、鷺流狂言「養老水」をとりあげた際、そこでうたわれるわらべうたのうち、解説にふれなかった部分から今回は続けていきたい。

鬼ノコヌマニ大豆ヒラウテ食フヨ〜。
鬼ノ留守ニ洗濯セウヨ〜。

鷺流「養老水」鷺伝右衛門保教本（享保九年：一七二四）より

このふたつは〈鬼ごっこ〉のとき、鬼が離れたところにいて、つい鬼にけしかけ、からかってうたうた。

○鬼どの留守に、せんだくしやうな。

釈行智「童謡集」江戸（文政三年：一八二成）

○鬼のおるすにおせんたくに参へた。

栗田維良「弄鳩秘抄」常陸（文化文政頃：一八〇四〜二四成）

江戸後期の記録にもこのような類歌が見えるほか、「嬉遊笑覧」（文政一三年：一八三〇刊）に、喜多村信節も次のように記述している。

○「鬼どの留守に洗濯しよ。」「鬼の留守の洗濯」といふことわざより出たる戯なり。

草履かくしの鬼決め　西川祐信画
絵本西川東童

下駄かくしの鬼きめ
鮮斎永濯画
吾妻余波

つまり、気兼ねをする人や怖い人がいない間に、たとえば口やかましい旦那や姑が出かけているときなどに、つかの間くつろいで息抜きをすることをいう大人の皮肉まじりの〈諺〉を、子どもたちがまねて鬼ごっこに取り入れたというわけである。

鬼の皿は一皿二皿

鬼ノ皿八一皿（ヒトサラフタ）二皿三皿（ミ）
四皿（ヨ）九皿（コ）十皿（ト）。

鷺流「養老水」鷺伝右衛門保教本より

この「鬼の皿」は、鬼ごっこの鬼を決めるときにうたう〈鬼きめうた〉である。

○鬼ノ皿（フーニ）ハ、幾皿ムサラ、七皿八皿、八皿ノ内デ、蓑（みの）笠キタモノァ、メエニガ鬼ヲニダ、新米数ノ子、ヒネナラソッチヘ、ノカシャァアマセ。

太田全斎「諺苑」江戸（寛政九年：一七九七序）

つかまえ鬼やかくれんぼ、草履かくしなどの鬼ごっこの前に、集まった子どものなかから鬼を決める際、みんなが円くなって、一人の親がその子たちの一人一人を指さすとか、体にさわるなどして廻り、うたの終わりに当たった者を鬼とする。また、めいめい両手を出して並べ、順に指さしていく「ずいずいずっころばし」と同じ方法や、草履をめいめい片方出して並べ、数えていく方法など、地域・時代により違いがある。

かくれんぼ　西村祐信画か
まる尽

鬼ごっこ 小寺玉晁画
尾張童遊集

足のつめたいに

草履かくし　二代目広重画
友雀道草双六

足ノ涼ニ草履買テ給レ〳〵。

鷺流「養老水」鷺伝右衛門保教本より

草履かくしで、隠された片方の草履を鬼が探し出す間、隠した子どもたちは〈片足立ち〉で見守る。それはおもしろい半面、不自由で辛い面もある。そこでつい鬼に早く探してくれよと文句もいいたくなるのだ。そんな微妙な心理がこのうたにはじつによく表れている。じつは、この狂言童謡の文言と一字一句も違わない伝承例が、元禄時代の鳥取藩にあったのにはびっくりした。

○足のつめたいに、草履買てたもれ〳〵。

鳥取藩、野間義学「筆のかす」鳥取・江戸中期（享保一七年：一七三二頃成）（同写本「古今童謡」　尾原・大嶋・酒井『「古今童謡」を読む』参照）

義学はここで、草履かくしの詳細な方法をも記録しているので、次に紹介しておく。よく知られている履物による〈天気占い〉の転用である。

まず、みんなの草履の片方を集め、「照るか、降るか」といって空へ投げ上げる。地面に落ちた草履が上向きになったら「照る」といい、裏返しになった方は「降る」という。その「降る」方の草履の持ち主を「寝ている」といい、寝ている方の子たちは別の所に集まる。「照る」方の子はめいめい自分の草履を適当な場所に隠す。「降る」方の子たちは隠された草履を探す。隠した子たちは片足跳び（ここでは「あしりこぎ」という）をしながら「足のつめたいに」をうたい、探し出すのを待つ。探し出した子は、次は隠す方にまわり、探し出された子は次は探す方に交代し、同様に続けていく。

蝶々とまれ

蝶々・子犬・手鞠・武者遊び　西川祐信画
絵本西川大和童

とんぼ釣り　西川祐信画
絵本東童

辰景画
絵本竹馬之友

蝶々トマレ。
蜻蜓返せ、蜻蜓トマレ。

鷺流「養老水」鷺伝右衛門保教本より

子どもの好きな蝶々やとんぼを捕らえるときのわらべうた。「蝶々とまれ、菜の葉にとまれ」の形で玩具の蝶々を売る〈蝶々売りの唄〉ともなり、歌舞伎役者の蝶々売りの演目ともなって広くうたわれ、明治期には唱歌にも取り込まれて今に至ることは、以前の連載「風流子ども歳時記」でも書いた。

とんぼを捕らえるには、止まっているとんぼを直接つかまえる単純な方法のほかに、技巧的な次の二種があった。まずメスのとんぼを採り、糸でくくり図のように小さい棹の先に結びつけ、これを振りまわしてオスのとんぼが近づくのをとりおさえる方法と、ブリという二個の小さい石を糸で結んだものを、空中に投げ上げて、とんぼをからませて捕る方法である。

参考までに近世の関連歌をあげておく。

○てふくとまれ。菜の葉にとまれ。菜の葉がいやなら手にとまれ。

この唄ふるき小唄なる（よし）、元文の頃歟、海老蔵が（蝶）売の狂言より再び此小唄はやりしとぞ。

（釈行智「童謡集」江戸）

○やんまく棹の先にとまり。

○やよ、かりがね通れ、さをになって通れ。

（鷺流「養老水」：「狂言記補遺」芳賀矢一　明治四三）

○棹になれ、ひつになれ。

（「筆のかす」写本「古今童謡」鳥取：『「古今童謡」を読む』参照）

「棹になれ、ひつになれ」「かりがね通れ、さをになって通れ」などは、いうまでもなく秋の夕暮れに一列あるいはへの字になって飛ぶ雁にうたいかけるわらべうたである。

連載 09

子ども虐待は、今

子どもの意見 その2

子どもの虹情報研修センター
川﨑 二三彦

子どもの声を聴く側は？

子どもの意見を聴き取るしくみの整備を規定した法改正が、本年4月に施行されたことは、前号で報告した。とはいえ、「聴くこと」はそれほど簡単なことではない。私が働く子どもの虹情報研修センターの研修に参加した人たちの声を紹介してみよう。

「子どもの声を聴きたい。聴かなければと思いつつ、思うように聴く時間が作れない」

「子どもが話さなければ、『特に話したいことはないんだな』などと勝手に決めつけ、関わりを終えてしまっていたと反省している」

「児童相談所はケースワークの都合で、学校や地域は安全面に偏って、施設は管理を重視して、子どもの願いより大人の事情を優先しているということはないだろうか」

彼らはいずれも、児童相談所や児童福祉施設、あるいは市町村等で子どもや家族を支援している人たちだが、子どもたちの声を聴けていないことに悩みつつ、その点を真摯に振り返っていた。

琵琶湖一周サイクリング

実は私にも苦い記憶がある。20年以上前になるが、京都府の児童相談所で勤務していた時のことだ。不登校が主訴の中学3年生女児との面接。当時の児童相談所は、不登校の相談が多かったことから、春と夏、彼らを対象とした琵琶湖一周サイクリングを実施していた。当時は全国的にもユニークな取り組みで、さまざまなエピソードが生まれた。自転車に乗れない中学生が、伴走車に乗って参加し、休憩時間に自転車に乗る練習を始めたり、触れられたくないはずの登校問題を、子どもたちが自ら話し合う場面も生まれた。サイクリングやその後のグループ通所に参加した者同士が結婚し、当時のスタッフがお祝いに駆けつけたこともあった。

「あなたも、このサイクリングに参加してほしいけど、どうかな」

面接に来た女児に対して、私は当然のように誘いかけたのであった。ところが、

「そんなことができないから相談に来てるのに……」

小さな声ではあったが、かすかに怒りの表情も見せている。返す言葉がなかった。いくら良かれと思っていても、彼女の気持ちを慮らず、こちらのつもりだけで面接を進めたのでは、決して子どもの声は届かず、権利を尊重していることにもならないのである。

声の聴き方―環境省の場合

では、子どもの声を聴くにはどうすればいいのか、日々そんなことを考えている時に飛び込んできたのが、水俣病患者や被害者団体と環境大臣との懇談会に関わる事件だ。

「妻は、『痛いよ、痛いよ』と言いながら死んでいきました。水銀を流さなければ、死ぬことはなかったろうと思います」

発言者がとつとつと話していると、環境省の職員が突然「話をまとめて下さい」と遮り、マイクの音源を一方的に切断してしまった。この日発言した6人のうち3人がマイクを切られており、そもそも環境省のシナリオには、「3分でマイクオフ」と書かれていたというのだから罪深い。

これまでから、児童虐待は社会全体で解決すべき問題だと言われてきた。角度を変えれば、子どもの意見はもとより、社会のあらゆる分野で当事者の声が尊重される社会でなければ、児童虐待問題の解決はおぼつかないのである。だから環境省の姿勢は、無関係に見える私たちの取り組みにも水を差すと言わざるを得ない。後に環境大臣が水俣市を訪れて謝罪しているが、それが当事者の声に謙虚に耳を傾ける姿勢への明確な転換となることを望むばかりである。

環境相 水俣病団体に謝罪
現地再訪 患者側「歴史に汚点」
音声切断
「しゃくし定規で溝」

本年3月25日付け毎日新聞朝刊の一面トップに、「児相一時保護中 通学6％」という見出しが躍った。2022年度に1週間以上一時保護された小中学生のうち、週4日以上通学した児童の割合が6％にとどまったというのである。児童相談所の一時保護所で保護された子どもが通学した割合はさらに低く、わずか0.7％だった。

こうしたデータをもとに、毎日新聞は、一時保護所を設置している全ての自治体の現状を調査している。たとえば、一時保護中の通学希望の有無を子どもに聞いているか否かを尋ねているが、そうした意向確認は、全体の3割程度にとどまっていたという。

これを見て、私自身がかつて児童相談所で勤務していた頃のことがしきりに思い出されてきた。当時通学できないのは当然のことであって、そもそも通学希望の有無を尋ねるという発想自体がなかったからだ。ただ、例外もあった。夜間定時制の高校に通う生徒の一時保護が長引くことが予想された上、欠席すると単位不足になって留年が必至だったことから、夕方高校まで送り、授業が終わる夜遅くに校門まで迎えに行ったのである。とはいえ、これとて本人の意向を尋ねたわけではなく、児童相談所の判断で行ったものであった。

児童相談所は全国で230か所あまり、そのうち一時保護所を併設している児童相談所は150か所程度しかない。そのため、子どもたちが所属する学校の多くは保護所から遠く、そもそも通学は困難であり、仮に近距離であっても送迎する人員不足という実情がある。

とはいえ、これらは全て、運営上の都合、いわば大人側の事情に過ぎない。つまり、子どもの声を聴き、その権利を尊重するためには、担当者の姿勢に委ねるだけでは不十分であり、声を生かすための施策を充実させることが不可欠なのである。なお、法改正に合わせて、今般全面的に改正された「一時保護ガイドライン」は、子どもの希望を尊重しつつ通学の支援に努めるよう求めている。

2016年の児童福祉法改正で、子どもを権利の主体者と位置づけたとき、私はようやく一つの到達点に達したと考えたのだが、それは到達点ではなく、子どもの声を聴き、権利を現実するための出発点だったことを、今さらながら思い知らされたのであった。

一時保護の子どもたち

ところで、子どもの声を聴き、子どもの権利を尊重するためには、関係者が真摯に子どもに向かい合うだけで足りるとは限らない。

毎日新聞
3月25日(月)
児相一時保護中 通学6％
自治体7割 意向確認せず
本紙調査

特集

お母さんのための 子守唄教室

第4回

日本子守唄協会理事長　西舘 好子

14. 外国にも子守唄があるのでしょうか

アメリカでは子守唄をlullabyといっていますが、なんと江戸時代にこの言葉を伝えたのは足利時代に来日した宣教師のフロイスです。フロイスは日本から、母親にいつも手紙を書き続けました。遠い異国で母親を懐かしく感じていたのでしょう。

中国では揺籃曲〔ヤオランチィ〕といっています。まさにゆりかごの意味です。ここでも、ゆりかごに揺られて、静かに眠りなさいというリズムで唄われています。リズムは四分の三拍子、八分の六拍子で行ったものが多いようです。

月は明るく　風は静か
よしよし　いい子
娘はわたしの宝物

といった意味のうたは中国全土に広まり、うたえない人はいないということでした。何処の国でも同じなのかも知れません。その土地で生まれたうたはその土地で聞くのが一番いいのです。

かといって、子守唄は、土地の文化や風土と切っても切れないうたばかりではありません。

確かに子守唄は民俗学、言語学、文化人類学、音楽、心理学、女性学と多岐の分野にわたって研究されていますが、そんな難しい概念にとらわれるのは、研究者だけにとどめておきましょうか。

長く歴史の中で根付いた子守唄を原型とすれば、時代が変わった今は、その目的のためにうたわれるうたはすべて子守唄としてとらえてよいのではないでしょうか。広い意味では、童謡も、テレビのCMソングも、アニメのうたも、民謡や軍歌も、詩吟さえも、応用編の子守唄といえます。昔であれば、相思の唄、きこりの唄、馬子唄、船唄、など、一日の労働の歌が子供の守唄だったのです。

今であれば、童謡の中から生まれた名曲「ゆりかごの唄」や「ねむの木の子守唄」などはきっと後世の人にまで歌い継がれていくに違いないと思われるいい唄です。

15. DNAの中にある子守唄

私たちは一人一人が生きている今も、多くの先祖のDNAを体の中に持っています。一人で生まれ一人で生きているように思っているのは大きな間違いで、なんと一人が1700人ほどの先祖をその体に持っていることになるのです。その先祖の誰もが子守唄をうたわなかったなどとは到底考えられないのです。周りの誰もがまったく口ずさむこともなかったなどとは思えません。

いつか、東京の町田市の養老院で、認知症になったご老人から、子守唄を聞くチャンスがありました。「覚えているわけがありませんよ」と介護の方がおっしゃいましたが、私が子守唄ではなく「子供のころ、こんなうたをうたってあそびませんでしたか」と話しかけて「ずいずいずっころばし」や「おつきさまいくつ」と続けてうたっているうちに、口をもぐもぐさせながら一緒にうたいだしたのです。だんだん「ねんねん」といった具合に子守唄に移行していきましたら、なんと長い子守唄をうたいだしたのです。しかも、後で分かったのですがそれは幕末のころの戯れ唄で、「唐ものもお伊勢の風に驚きし、今はあべこべ　伊勢が驚く」といったものからそのフレーズが延々と続きます。そして、最後に「ねんねんさいさいねんころり」となります。戯れ唄の一つでしょうが、このうたをおばあさんは子守唄としてだれかから聞いていたようです。

認知症どころか、大変な記憶力です。しかし、子供のころに覚えたうたはこうして決して忘れる事がないのです。すっかり子どもに帰ったおばあさんの顔は、菩薩顔でした。どんな人にも、どこかでうたってくれた人と出会って可愛がられた時代があるのです。

これが人間のつながりというものです。眠っていた子守唄が顔をのぞかせたようです。

その後、そのご老人はうたを次々にうたうようになって、毎日とても楽しそうに暮らしていると伺いました。

16. 子守唄はお父さんが唄ってはいけないのですか

とんでもない、是非うたってもらって下さい。孫ができると自然にうたう子守唄も、我が子にはうたったことが無いというお父さんは沢山います。「いやぁ、音痴なものでぇ」とか「忙しくて」は通用しません。

そもそも父親とは何なのでしょう。

最近では母親の付随物のようになり「あなたも怒りなさい」といわれて母親の命令に従うといった父親も増えてきたと聞きます。

疲れているという一方で同僚とは声を嗄らしてカラオケに興じるというエネルギーは、憂さ晴らしのためだけに発揮されるものなのでしょうか。

しかし、父親たるもの、育児の責任は家庭にあって母親だけが子どもにかかりっきりなどという生活に安住しているとしたら、それは大きな間違いです。

育児する母親の安心と余裕は父親である夫が作るものです。

妻の支えは夫の愛情と信頼、というのは理窟であって、夫の手助けと誉め言葉が大切です。

赤ちゃんというのは、周囲の環境や刺激を積極的に取り入れることに長けています。

敏感に夫婦のありようをキャッチして、どうも不穏だとなれば、ご機嫌斜めとなるのです。

まず、授乳中はできるだけお父さんも、お母さんと一緒に赤ちゃんの様子を見てあげて下さい。

お乳を飲んでいるときは、赤ちゃんの大脳が活性化しているときであり、お母さんが一番ゆったりとしている必要があるときだということを忘れないで頂きたいのです。

いそがせたり用事を言いつけたりすれば、お母さんの気が散るばかりか、赤ちゃんが落ち着きません。当然お母さんの心も安定をなくしてしまいます。

母親を経済的に、または情緒的に不安にさせないという父親の役目をお父さんがひとりで背負うのは、現実にはむずかしい時代となりました。しかし、子どもがいる以上、この小さな命を守るのは両親となった夫婦の最大の仕事のはずです。

父親はまず抱いてあげることから始めてみてはどうでしょう。抱くという行為を意識的に行っているのは人間だけです。

動物は、抱くというのではなく子どもがしがみついていくといった感じです。それは生まれ落ちたときから、母乳を求めて自分のほうから母親に近づいていくことが動物の本能だからです。

人間はそうはいきません。抱かれるまで赤ちゃんは仰向けに虚空に手足をばたつかせているばかりです。不安定この上ありません。手を差し伸べてあげられるのは人間だけです。お父さんの手は「救世主」に近いのだと、認識していただきたいのです。

ついでに口の端に出たうたを、たとえ昨日のカラオケでうたったうたであっても、アレンジしてうたってみるくらいの「父親の心」にスイッチを入れていただきたいと思います。

昭和一桁ベビーブームの子どもたちの聞いていた子守唄には「軍歌」がとても多いという事実がわかりました。それは、戦地から命からがら帰還した父親の青春の思い出のうたが、戦地でうたった軍歌であったということです。子の誕生に当たって、父は命のうたとして、子を抱いて、または膝の上に乗せてうたったのでしょう。

どんなうたであれ、朧げでもそのうたを心が記憶していたということです。

父親こそ子守唄をうたうべきだと痛感します。

これからの日本は不安定で子がかわいそう、などとご託宣を並べるより、てもも仕方ありません。貧しい中でも何人もの子を育ててきた自分たちの親のたくましさや明るさを復活させるためにも、次世代のためにもうたって欲しいのです。

次号につづく

連載

日本子守唄紀行

第9回「佐賀の子守唄とヨイトマケ」

鵜野 祐介（立命館大学教授）

子守唄やわらべうたの中には、歴史的な出来事を刻み込んだものがある。有名なのが、西郷隆盛が西南戦争に敗れて自刃したことを娘が告げる手合わせ唄・手まり唄「一かけ二かけ」である。類歌は全国各地で伝承されているが、ここには鳥取県米子市で採録されたものを載せておく（歌い手は昭和二二年生まれ、採録者は酒井董美氏、鳥取県立博物館収蔵）。

一かけ　二かけ　三かけて
四かけて　五かけて　橋をかけ
橋の欄干　手を腰に　はるか向こうを眺めれば
十七、八のねえさんが　片手に花持ち　線香持ち
もしもしねえさんどこ行くの
わたしは九州鹿児島の　西郷隆盛娘です
明治十年三月三日　切腹なされた父上の
お墓参りにまいります
お墓の前で手を合わせ　南無阿弥陀仏と拝みます
拝んだ後から魂が　フーワリフワリと　じゃんけんぽん

史実としては、西郷が没したのは明治十年九月二四日であり、事実とは異なっているが、各地の類歌でも日付はさまざまである。

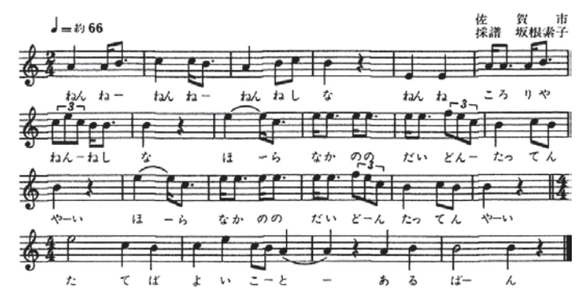
歴史的証言を刻むものが他にもあるに違いないと考え、『日本わらべ歌全集』全二八巻（柳原書店）を通覧していて見つけたのが、「佐賀小守歌」と題する子守唄である（『全集24 佐賀・長崎のわらべ歌』一九八二年、134頁）。編者の福岡博氏によれば、佐賀市在住の下村智氏（明治二二年生まれ）宅で、智氏の父養之助（昭和三年没）の手によって書かれた「小守歌の記録」が保存されていたという。

この記録によれば、元亀元年（一五七〇年）八月、豊後の大友宗麟が佐賀（佐嘉）城に攻め寄せた時、下村氏の先祖にあたる「長興寺（佐賀市兵庫町下村にあり）の芳叔、後名生運」が、「自ら長刀を横たへて、村中の老若百姓」を駆り立て、「東中野天満宮の神官が仲々の懶者で尻重く出陣しないので、武勇を励まして神官の手を取り引き立てた」。その時に発声した一句が子守唄となり、「明治二十七、八年頃迄佐賀県付近の年寄住民達」が歌っていたという。また、下村生運は竜造寺家や鍋島家に仕えて、元亀元年の戦いをはじめ、文禄三年の朝鮮の役などにも出陣したとされる。

福岡氏が下村智氏に歌ってもらった「佐賀小守歌」は、楽譜と共に『佐賀・長崎のわらべ歌』に掲載されている。

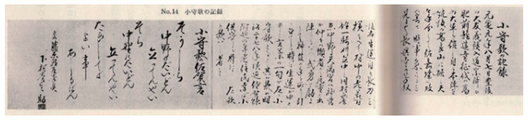
ねんねねんね　ねんねしな
ねんねころりや　ねんねしな
ほーら　中野のだいどん
立ってんやーい
ほーら　中野のだいどん
立ってんやーい
立てばよいこと　あるばん

この「小守歌の記録」は現在どこにあるのだろうか？　手がかりを求めて、今年（二〇二四年）三月下旬、佐賀市を訪れた。最初に向かったのが、ＪＲ佐賀駅から南へ歩いて約



二〇分の佐賀県立図書館である。

司書の方に『佐賀・長崎のわらべ歌』のコピーを示して、「小守歌の記録」の所在について調べていただいた。ネット検索していただいたが、同館をはじめ佐賀県内の各図書館や博物館などにおける収蔵は確認されなかった。但し、編者の福岡氏がやはり編者の一人として関わった『佐賀のわらべうた』（音楽之友社、一九六〇年）という本があることが分かり、閲覧することができた。『佐賀・長崎のわらべ歌』よりも二二年前に出版されており、こちらが典拠となっていることは明らかだった。内容はほぼ同じだったが、福岡氏が撮影したと思われる「小守歌の記録」の写真が掲載されていた。後日、古書店のネット販売で『佐賀のわらべうた』を入手したので複写を紹介しておく。



福岡氏が県立図書館に長年勤め、最後は館長にもなった方であることも判明した。そのせいもあってか、司書の方も丁寧に調べて下さったが、「記録」の所在は分からなかった。

但し、「記録」に記されている「長興寺」は現存していることを教えていただき、もしかしたらそこに保管されているかもしれないとの推論が浮かんだ。そこで次に、長興寺へ向かった。

県立図書館からいったん佐賀駅までバスで戻り、そこから別のバスに乗り換えて東へと約二キロ行った。「下村河畔バス停」で下車して、雨の中しばらく歩き回った後、広い道路から少し奥まったところに長興寺が見つかった。

長興寺二五世住職の田口一樹氏がご在宅中で、突然の訪問にもかかわらず親切にご対応下さった。そして、「記録」はこの寺にはないが、今から六〇数年前に福岡氏が取材した下村智氏のご子孫の方がお持ちではないか、現在その方は和歌山県橋本市に転居しておられる、ということで連絡先を教えていただいた。後日、下村氏と電話で連絡を取ろうとしたが繋がらず、ひとまずは今回のクエスト（探索の旅）を終えることにした。

ところで、取材の中で田口氏が興味深い話を聞かせて下さった。『佐賀のわらべうた』にも『佐賀・長崎のわらべ歌』にも、この唄が「石つきうた（歌）としてもうたわれた」と福岡氏が書いている点に話題を転じたところ、田口氏はこの「石つきうた」について詳しく説明して下さった。当地では「石棒突きのうた」とも言われ、昭和一七年生まれの彼が子どもの頃にも、「石棒突き」の作業をよく目撃したという。これは、建築現場などでの地固めの時、数人がかりで重い石槌を滑車で上げ降ろしするもので、それぞれが握った綱を引っ張っては手を離し、石槌を地面にドスンと落とす。そのタイミングを合わせるための掛け声として歌ったのが「石つきうた」だった。楽譜をそうして見れば、「四分音符＋一六分音符＋符点八分音符」というリズムは力仕事にも符合することが分かる。やさしく歌えば子守唄になり、力強く歌えば石つき唄になる。

これは「ヨイトマケ」とも呼ばれた。一九三五年長崎市生まれの歌手・美輪明宏が作詞作曲して一九六六年に発表した「ヨイトマケの唄」は、幼少期に一緒に育った友人の亡き母（地ならしの日雇い労働者）を回顧する歌とされる。「ヨイトマケ」の語源は、滑車の綱を引っ張る時の「ヨイっと巻け」の掛け声だという。美輪はこの歌をこう結ぶ。「今もきこえるヨイトマケの唄／今もきこえる子守唄／父ちゃんのためならエンヤコラ／子どものためならエンヤコラ」――。今も昔も、子守唄は母の労働唄なのかもしれない。

連載

酒は天の美禄にして最強の養生法なり

帯津 良一

自然治癒力を高める最大の要因は心のときめきであることは60年余にわたって、がん治療にかかわって来た医師としての実感です。だから、患者さんには

「ときめきのチャンスを逃さないでください」

と口を酸っぱくして言っています。

しかし、心のときめきの原因となれば、人それぞれですから、特別な事例を挙げることはありません。すると時に、

「参考のために、先生のときめきのチャンスを教えて下さい」

という質問を発せられることがあります。私のときめきのチャンスといいますと、

晩酌、講演と執筆、太極拳、恋心

などですが、その方の年齢や病状を考えて、いちばん相応しいものを選んで、お話しいたします。

今回は、その晩酌によるときめきについてお話したいと思います。まずはその歴史を繙いてみましょう。1945年、太平洋戦争終戦の年のわが家の晩餐風景です。丸い卓袱台を囲んで両親と私と弟、小母さんの5人が楽しげに食べています。しかし、それぞれの前にはマッシュ・ポテトが一皿ずつです。米飯などには滅多に在りつけない時代です。その中で、目を細めてお銚子を傾けている父親の姿が大好きでした。

次は高校受験の頃、朝型の私は早朝に受験勉強をするので、夕食が済むとすぐに床に。その夕食に、よく眠れるようにとコップ一杯の赤玉ポートワインを小母さんがつけてくれるのです。これは味も良く喜んで飲んだものでした。高校は都立小石川高校。川越から一時間半をかけての通学です。この時代は専ら映画少年。お酒には興味を示しませんでした。

大学時代は一杯50円のトリスハイボール。下宿の近くの「バー・フローラ」のママさんが大好きで、よく通いましたが、それでも週に2回ほど。飲み過ぎるということもありませんでした。卒業して東大第三外科に所属して外科医になると好き仲間に恵まれ、仕事の達成感も相俟って、一気に飲む機会も酒量も増えました。特に学位論文のために臨床を離れて研究室生活主体の期間は患者さんに迷惑をかけることがないので、つい飲み過ぎて、しばしば二日酔いに悩まされたものです。

次いで東京都のがんセンターとしてスタートした都立駒込病院に出向させられた7年間は仕事も飲酒もじつに充実した時代でした。私の担当は食道がんの手術。手術日は早朝の5時台に家を出て、自転車で東上線の川越駅に行き、東上線とJR線を乗り継いで田端駅に。駅の近くの簡易食堂で簡単な朝食を済ませて、7時過ぎに病院に到着。手早く病棟回診を済ませて、8時過ぎには手術室へ。

執刀は9時。終了は15時頃。麻酔が醒めるや否や、腕利きの看護師さんたちの待つ集中治療室に患者さんを移し、脈拍や呼吸などのバイタル・サインの安定するのを見て、日勤の終えた看護師さんの一人、二人を連れて夕暮れの街へ。お酒はいつもより少量だが、疲労感と達成感の入り混じった身心にはじつに心地良い。1時間ほどで病院に帰り、患者さんの落ち着いているのを見届けたあと14階にある医局へ。

手術日は不測の事態に備えて、集中治療室の当直室に泊まることにしているので、10時頃には当直室へ。しかし、きちんとした手術をしていれば、不測の事態など起こりようがなく、起こされた記憶は一度もありません。翌朝の4時半ごろに起きて、患者さんの落ち着いているのを見届けたあと、14階の医局へ。明け始める下町の風景を見渡しながら、ある種の感慨にふけったものです。

以上が手術日の日程ですが、全国から集められた、精鋭たちの高い志のつくる病院の場のエネルギーはきわめて高く、日々、気持ち良く仕事をし、気持ち良く飲むことができました。胃がん手術を担当していたK先生、肺がん手術を担当していたI先生とS先生などと病院の近くのお寿司屋さんや居酒屋さんでよく杯を酌み交わしたものです。エネルギーの高い場の然らしめるところなのか。あるいは私自身が少しでも成長したためなのが。この時期は二日酔いがかなり減りました。言ってみれば、お酒の飲み方が上達したということなのでしょうか。

1982年11月に郷里の川越市に病院を開設してからはますます上達度がアップしたものです。開設以来現在までの41年余にして、二日酔いは只一回、休肝日もほとんどありません。二日酔いは中国は内モンゴルのホロンバイル大草原で草原の友から挑まれた乾杯の応酬のなかで不覚を取ったのです。これを例外的なケースと考えれば二日酔いは一度もなかったといってもよいでしょう。

これまで漠然と、〝お酒〟という言葉を使って来ましたが、これはイコール日本酒ということではなく、アルコール全般を指します。ということでお酒の種類ということになると、均せば日本酒でしょうが、40年余にわたって通い続けた「バー・フローラ」では最初がトリスのハイボールでやがて、専らカティ・サークでしたし、若き外科医の頃、T先輩、U先輩と三人でいつもごいっしょした池袋の居酒屋の「こばやし」では、銘柄は忘れましたが、専ら、焼酎でした。

そして、アメリカからホリスティック医学が入って来ました。ホリスティック医学とは体、心、命が一体となった人間まるごとをそっくりそのままとらえる医学です。がんは体だけではなく心にも命にも深くかかわった病であることを知っている私はすぐにこれに飛び付きました。

1987年に

日本ホリスティック医学協会

を立ち上げ、その一環として、2000年

日本ホメオパシー医学会

を立ち上げ、その勉強のためイギリスはスコットランドのグラスゴウ詣でが始まったのです。そこで、なんとスコッチのシングルモルト・ウィスキーの味を覚えてしまったのです。いまでもわが晩酌の最有力メンバーとなってしまいました。

と同時にホリスティック医学の一部として養生法を学んでいるうちに、貝原益軒の『養生訓』のなかに在る

酒は天の美禄なり。少しのめば陽気を助け、血気をやはらげ、食気をめぐらし、愁を去り、興を発して甚だ人に益あり

という文章に行き当たってしまったのです。酒は天からのご褒美。立派な養生法だったのです。振り返って思い当たる事が一杯です。

少し遅れて『納棺夫日記』(青木新門　文春文庫)のなかの

死に直面して不安におののいている人を癒すことのできる人は、その人よりも一歩でも死に近い処に立つことのできる人だ。

という意味の文章に行き当たりました。患者さんの死の不安を和らげことは私たちの仕事の大事な一部です。そこで70歳を機に、今日が最後の日と思って生きることにしたのです。すると毎夕の晩酌が、イエスの最期の晩餐になったのです。ビールを一気に飲むと背筋がピンと伸び、ウィスキーをグラスに注ぐと、あと5時半、しっかり生きようという覚悟が生まれます。そして飲むほどに酔う程ほどにこの覚悟が大きくときめきに変わるのです。紙数が尽きました。以下は次号で。

帯津良一　プロフィール

1936年、埼玉県川越市に生まれる。東京大学医学部卒業、医学博士。東大医学部第三外科に入局し、その後都立駒込病院外科医長を経て1982年、川越市に帯津三敬病院を設立。2004年には、池袋に統合医学の拠点、帯津三敬塾クリニックを開設。

日本ホリスティック医学協会名誉会長。著書に「代替療法はなぜ効くのか?」「健康問答」など。その数は100冊を超える。

連載

直島便り㉖
私の島暮らし

南無庵　庵主　山根 光惠
山口県長門市出身
浄土真宗本願寺派 布教使

早いもので、私が香川県の直島で新しい暮らしを始めてもう十年近くが経った。

その間に、年号も平成から令和へ、天皇陛下も代わられた。そしてあの忌まわしい新型コロナウイルスによる疫病が世界中をおびやかし、あの天空のチベットでさえ、コロナのために人々がマスク生活を余儀なくされているとテレビで見た時はビックリした。

日本では、横浜に着いた豪華クルーズ船の中で感染者が出たと最初のニュースが報じられてから、その後数年間の騒動は、本当に思い出したくもない地獄のような日々だった。

感染だけは避けたいと外出も控え、なるべく人との接触もせず、耐え忍んだ日々であったような気がする。

そんな中、親しい友達の、その友達がコロナで亡くなられた。私もその方とは友達を通して親しくさせていただき、お世話にもなっていた方なので、突然のことに「なぜ?」という以外に言葉も出なかった。虚無感におそわれつつ、これは他人ごとではないのだと、つくづく世の無常を感じた。

その後、ワクチン接種もどんどん始まって死者の数も減ってきた。もちろん今も油断はできず、コロナに罹る人は絶えた訳ではないが、割合軽く済むことが多くなった。私もまた、今年の初めに罹ってしまったが、本当に軽く済んだ。思えば亡くなったその知人も、今頃の感染であったなら、亡くならずに済んだのではないか…と悔やまれてならない。

コロナも五類認定になったとたん、日本国中の人、いや、世界中の人があちこちに移動し始めた。「インバウンド」とやらで観光客の移動がすごい。特にアートの島として知られる直島は、アメリカやヨーロッパの人たちを中心に外国人からぜひ行ってみたいスポットとされているようで、この頃は、島の中のどこに行っても外国人であふれている。一週間以上滞在する人も多く、荷物の量も半端ではない。対岸の岡山県・宇野港にはヨーロッパの豪華クルーズ船も度々停泊している。

私もいつの間にか後期高齢者となった。若い頃は病気ひとつしたことがなく、税務申告の時には医療費控除を受けるもなかった。ところが後期高齢者になったとたん、脳梗塞もやってしまったこともあり、税務申告の時には、いつも医療領収書を束にして出す始末だ。それでも、おかげで後遺症もほとんどなく済んでいるし、何とかこうして一人暮らしができていることはありがたい。まだ、運転もしているが、島の道路はほとんどが片道一車線なので、交通事故も起こりにくい。事故が起こるのはたいてい高齢者の自損事故くらいである。

カタバミ　こんなところにも

島で少し不便なことといえば、生鮮品の買い物だろうか。島にはコンビニが一軒と三菱マテリアルの生協が二軒あるのみ。ただ、フェリーに二十分乗って宇野に行けば大きなスーパーがたくさんあるので、島の人の多くは宇野に行って買いものをする。

私は、アマゾンなどネットで買うことも多いのでほとんど不便はない。特に水やお酒など、重いものはネットで買うと家まで届けてくれるので助かる。ネットショッピングの残骸の段ボールの山を見て、「また買物したね」と友達からたまに笑われてしまうが。

敷地があるから、暮らし始めた頃は「畑を作って農業を…」と思ったけれど、野菜栽培は本当に難しく、やめた。近所の人たちは本当に上手に野菜を作っているけれど、私には無理だということがすぐにわかった。幸い皆さんが、できたものをよく下さるので、それだけでもう十分。この頃は、もっぱら花を植えたりして、その世話をすることが多い。

花といえば、敷地の一隅にある、我が家の桜は見事である。これは私が植えたのではなく、昔からここにある。春には見事に咲いてくれるから、「ありがとうね」と感謝しながら、花の盛りを友人たちと皆で楽しむ。手入れといえば、台風で塩水を被った時に水で洗ったりしてあげるぐらいではあるが、そのお礼を返してくれているのかなと思うほど、見事に咲いてくれるのがうれしい。

木の下からの眺めがとても美しいので、色々な人にも見てもらいたいと思い、「どうぞ下にも降りて見てください」と、庭へ降りる坂の上に張り紙をしたら、私がいない時でも降りて見てくださる方があるようで、インスタグラムなどSNSに上げたという人もあるらしい。美しいものを皆で共有できるのはとてもうれしい。「来年もこの桜を見られるといいね」と願いを込めて、枝もたわわになった桜を皆で見上げている。

さて、桜が終わると、次はあじさいの季節がやってくる。あじさいは、植えた場所の土によって様々な色に変化したりするところも楽しい。周囲が草ぼうぼうのままではちょっと困るので、草を刈ってもらった。今度は皆であじさいの美しさを楽しみたい。

こうして、直島の自然と楽しい仲間に囲まれて楽しく暮らしている。

合掌

今年の桜

これから色ずくあじさい

活動報告

■配食（毎月第二・第四木曜日）

10名～20名の範囲でシングルマザーと困窮者、独身男性や特殊家庭、突発的に急を要する人に配食しています。今回は税理士資格取得の女性の自立完了がありました。保育士の資格取得に頑張っている女性も間もなく自立していくようです。

男性の方が、なかなか自立できない事情の方が多いようです。精神的な病で病院に通っている方の自立は時間がかかるようです。

折があれば、さまざまな相談に乗るようにしています。

本当にお困りの方のお手元に届けるよう配食はしていきたいと切望しています。

■相談業務

今月に入って、下仁田ねぎぼうず館でシングルマザーの相談を受けました。

一人は離婚の調停に申告しなおしと積極的に人生と取り組む覚悟をし、もう一人は薬局への就職が決まり報告にいらっしゃいました。

一人で悩む時代ではありません。是非、相談して下さい。メールでもかまいません。

画　永瀬嘉平

■「尾原昭夫 わらべうた講座 戸外遊戯歌編」

【日時】 2024年8月3日(土)
13:30～15:30
【会場】 東京都東村山市市民ステーション
サンパルネ　コンベンションホール
【講師】 尾原昭夫氏
（わらべうた・子ども文化史研究家）
【主催】 わらべうたあそび研究会・WAK
【後援】 子守唄・わらべうた学会
【参加費】 5,000円
【問い合わせ先】平沼美春氏
（miharu.hiranuma@gmail.com）

■ららばい合唱サークル 皆で楽しく歌いませんか

【日時】 2024年7月23日(火)
13:30～15:30
【会場】 東京都台東区 入谷区民館4Fホール
【参加費】 1,000円
【問い合わせ先】
ららばい合唱サークル　会長 今井要一
TEL 090-4072-3954

新作

INTRODUCTION

QRコードで聴く
「島根のわらべ歌」
酒井 薫美 著

郷土への愛をこめて収集した民話、わらべ歌・昔ばなし、などが楽しく聞くことができます。

今井出版
2,420円（税込）

令和6年7月1日発行

応援してくださる方々ありがとうございます

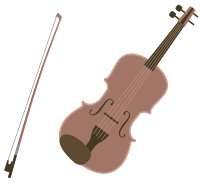
協会の活動にご協力くださいました皆様、ご寄付を有効に使わせて頂きます。
これからも日本子守唄協会への応援をよろしくお願い申し上げます。
温かなご支援を本当にありがとうございます。
2024年4月1日から2024年6月20日現在　五十音順　匿名希望11名（敬称略）

【個人】

青木健次
青戸雅之
青山司
赤坂みどり
浅井典子
里見哲夫
浅野美由紀
浅利香津代
麻生　智
阿部輝彦
有馬　絹
安藤和代
井口久美子
井坂義雄
磯部裕子
井田範子
伊藤　守
伊庭桂子
井上かず子
今井要一
今村威
今元弘子
上原孝子
臼田武正
梅田郁子
浦井正明
江藤昭子
江村　清
大河原尚夫
大野隆司
大山加代子
岡田詠美子
小熊幸一
奥村啓子
奥山糸子
小倉　惠子
尾原昭夫
帯津良一
とし
片山雅文
加藤恵子
門山榮作
神長倉万美子
上遠恵子
川北恭伸
川越　ゆり
川下則子
河原みさ子
神崎邦子
神戸精一
北　実
木下俊明
木村泰雄
国見修二
小井土洋一
小山啓子
近藤征治
斎藤進也
酒井董美
佐々木喜久子
佐藤公夫
佐藤久子
佐藤久光
清水睦夫
白石源次郎
神　秀俊
須賀正二
菅佐原道夫
菅原芳徳
杉野善彦
杉本太郎一
須崎晃一
鈴木としお
マッチ坊や
鈴木善広
芹澤文子
田井二郎
高瀬得尋
高橋如晴
高原政子
高松榮子
竹内景哉
武智泰子
竹之下典祥
田尻由貴子
棚橋牧人
玉谷邦博
千野千鶴子
辻　容子
徳永雅博
泊　和男
富田冨士也
砥綿隆昌
中島富志子
永田　亨
長縄千鶴子
永見徳代
中元修治
西尾まき
西前幸子
庭山正一郎
則武清司
橋本　昌
濱口敦子
原田直之
治田るり子
平沼美春
平野文興
廣瀬俊之
福井典子
福島昭子
福永教正
房野ＪＯＹ郁子
フジコ・ヘミング
藤澤　昇
藤島寛昌
藤村志保
藤本浄彦
藤森久美子
本條秀太郎
増田善弘
松代洋子
松永忠夫
丸山恒子
宮﨑直子
宮地勝美
武藤元昭
村井繋雄
村田正巳
きみさん
安元稔倶子
山浦敬子
山川　忠
山川敏明
山口洋子
山下五郎
山田秀甲
山根光恵
山本ヤエ子
湯川れい子
吉田紀世子
吉田　博
吉田由美子
吉村啓治
渡邉武雄
和田晴美

【団体】

株式会社致知出版社
長谷川トラストグループ株式会社
セカンドハーベスト・ジャパン
全国わらべうたの会
株式会社ミールケア
株式会社カガヤ不動産
柳橋よし田



ご寄付の応援をお願いします！

日本子守唄協会の活動は、皆様からのご寄付に支えられております。すべての子ども達が希望に満ちた未来をつかめるよう、皆様のお気持ちの託された寄付金を、様々な活動にいかしてまいります。

ご寄付をいただきました皆様に小冊子「ららばい通信」、イベントのご案内、また活動報告をお送りさせていただきます。どうぞ時期や金額に関わらず、年間を通してご寄付をお願い申し上げます。ご寄付への詳細は、日本子守唄協会事務局までお問い合わせください。

【寄付振込先】

○みずほ銀行　浅草橋支店
（普）1090012　トクヒ）日本ららばい協会
○郵便振替口座　00150−3−575309

皆様からのお便り・ご投稿をお待ちしております。

◎子守唄について疑問に思うこと・知りたいこと、子育てについて思うこと、親子の思い出話などお送りください。思い出の写真なども募集しております。
◎あなたの町の地域活性化のための活動や育児支援活動、町ならではの活動など紹介したい情報がございましたら、ぜひぜひお教えください。「ららばい通信」を通じて地域の情報交換をしませんか？
◎皆様と共にららばい通信をより良いものにしていきたいと考えております。お気軽にご意見・ご感想をお寄せください。

日本子守唄協会事務局　編集人・西舘好子
〒125−0054
東京都葛飾区高砂3−13−13 三浦ビル1階
TEL　03−6458−0283
FAX　03−6458−0284
Eメール　info@komoriuta.jp
URL　https://www.komoriuta.jp/

ららばい通信ご入用の方は当協会にご連絡下さい。
また、保存希望の施設や団体の方も合わせてお申込みくださいませ。

［発行人・編集人］西舘好子
［発行所］NPO法人 日本子守唄協会　〒125-0054 東京都葛飾区高砂3-13-13 三浦ビル1階
TEL 03-6458-0283　FAX 03-6458-0284　E-mail info@komoriuta.jp　URL https://www.komoriuta.jp/